

【福島大学むらの大学アーカイブ 7】【南相馬 Chapter 2】

震災を乗り越えて

現在も前向きに進む廣畑さん

小高工房代表 廣畑 裕子さん



インタビュー日時：2023年9月25日

インタビュー場所：双葉屋旅館

聞き手：井上歩郁、田中希奈、永井恵衣、八木田さくら、前川直哉、久保田彩乃

プロフィール

1958年10月生まれ（インタビュー時64歳）福島県南相馬市小高区出身・在住。福浦小学校、小高中学校、小高商業高校を卒業後、東洋通信機に就職（1977～2001）。退職後、大熊町の印刷会社に勤務（2003～2013）。現在は小高工房の代表を務める（2017～）。

1. 震災前の小高と生い立ち

★廣畑さんの学生時代や震災前の小高について

—学生の頃、県外に出たいと思われたことはありましたか。

廣畑：将来、やってみたいことは何だったんだろうなと思うけど、取りあえずうちから出ようっていう感じはあんまりなかったね。

—ご実家を守っていききたいという想いがあったのですか。

廣畑：私は三姉妹の一番上だったから、物心ついた時からうちにいるもんだっていうふうに育てられてるんです。世の中に出ていろんなところに行くっていうのもいいかなと思ったこともないこともなかったけど、ただ、うちにいるっていう選択をしたんだな、多分ね。

—震災以前の小高で好きだった場所などはありましたか。

廣畑：いろんなところ好きだったけど、海が結構好きでした。歩いて行っても5分かそのぐらいなので、遊びに行っていましたよ。

—海ではどんなことをして遊んでいたのですか。

廣畑：海水浴をしていました。宮田川という川では、牡蠣とかが採れるんです。中に入ってから、子どもの牡蠣を採って食べたぐらい。今考えると、よくあたらなかったなど。あと、ちっちゃいカニとかいっぱいいるから、カニの穴に棒を突っ込んでみたいないたずらして。そういうふうにして過ごす日常がわりと好きでしたね。

—学校行事などで、小高ならではのものはありましたか。

廣畑：1回だけなんですけど、私の時代で1回だけ学校行事で稲刈りに連れて行かれてやってきた覚えがあります。中学1年ぐらいだと思うけどね。それがえらく楽しかったなっていう思い出は確かにあって。じいちゃん、ばあちゃんにいっぱいごちそうになりましたね。稲刈りは辛かったけど、ごちそうはおいしかったんでね。まあまあ楽しかった思い出しかない。1年生は（刈った稲を）運ぶだけだったんで。

—小高にはお米を作ってる農家さんはおられましたか。

廣畑：たくさんいました。ほとんどのうちで作ってるみたいなイメージはありましたね。町場は作ってないの当たり前だけど、それもそれで。

—廣畑さんのご実家に田んぼや畑はありましたか？

廣畑：田んぼはありましたね、家族がやりましたね。あと自分のうちで食べる分の野菜ぐらいはみんな作っていました。

—ご実家は農業だけではなかったのですか。

廣畑：いや、うちの父は会社員だったし、母が農家をやりながら、父は働きに行ってみたいな感じでした。

—廣畑さんご自身は、高校を卒業して就職されたのですか。

廣畑：その時は東洋通信機っていう会社名で、後にエプソンになっていくんだけど、そこに25年間勤めました。不思議なことにその時の人たちが、今、(現在運営している)小高工房に事あるごとにみんなやってきて。だから、18歳、19歳、20歳ぐらいの時の付き合いの人たちが今もやってきて、「裕子、お茶入れろ」っていうんです。震災でばらばらになっちゃったけど、「あそこに行けば裕子いるぞ」みたいな話になっちゃって。要は会社が震災でばらばらになったんだけどみんな帰ってきたらとりあえず来てみるみたいなことになっちゃってる、今。現・菊池製作所っていう会社を小高に造ったけど、あそこがその工場だったんです。だから不思議なのは、19、20歳から始まって30代になるまでそんな密にみんな付き合ってたなくても、同じ工場の中にいたっていうちょっとした繋がりですりあえずやってくるみたいな。

★子どもとの時間

『廣畑さんは、18歳から勤めてきた会社を42歳の時に退職されました。退職を決めたきっかけは、会社の仕事内容だけでなく、当時小学5年生だった息子さんのことがあったといいます。』

廣畑：(仕事をしている間)私は子どもをずっと保育所に預けてて、次、小学校に上がったからも、彼の思い出の中に”うちのお母ちゃんは忙しい人”っていうことしかないなと思ったんです。うちの子ども、保育所に行って、小学校に入学したばかりの頃、私が会社から帰って夕方7時ぐらいに、子どもに私は「お母さん。お帰り、今日、ちゃんと仕事やってきた？」って言われたんです。1年生にちゃんと仕事やってきた？って聞かれたんですよ。はあ？と思った。「何で？」ってよくよく聞いてみると、「お母さんは365日24時間仕事大好き人間だから」って。会社が24時間動いてるようなところだったんです。だから、夜、電話がかかってきて何かトラブルあったら行くんですよ。だから、うちのお母ちゃんはちゃんと仕事してないから、夜、呼び出されんだと。後から辞める時のことを考えると、そのとおりだと思いますよ。いなくてもいい状態つくってないから。プロフェッショナルじゃない、社会人として。だから、そこからいろんなことをやりながら、彼が5年生になる時に、私は

手を挙げて（会社を辞めたいと言って）。それが40歳～43歳なんですけど。5年生になる時に、私は会社を辞めるっていうことを決めたんです。なぜなら、彼の思い出の中にお母さんといった思い出は多分ない。帰ったら自分で鍵開けて、自分でうちに入って、自分でできてるおやつを食べて、ずっとテレビの前でゲームやって、「お母さん、ああ、お帰り」ぐらいで。母親がうちにいて待ってるなんていうことは1回もしたことないんです、彼は生まれてから。だから、彼が小学校のうちに一緒にいる時間を最低限取ろうと思ったんです。彼の頭の中に、家に帰ったらお母さんがいておやつを食べたぐらいの思い出、1つぐらい作りたいなと思ったんです。皆さんの中でうちに帰ったらそういう思い出あるかないかは、それは別です。そのうち、そのうちの考え方があるし、お母さんの考え方も違うし。

—お子さんとの時間を作りたかったのですね。

廣畑：はい。だから、朝、行ってらっしゃいって言ったら、もう一生懸命うちのことをやっちゃって、そして、夕方3時になったら絶対小学校に迎えに行って。最初は子どもも楽しかったらしいんだけど、1カ月も過ぎると、「何で毎日いるの？」みたいなこと言われるようになってしまいましたね。それまでは息子の友達がうちに遊びに来るとかあんまりなかったんだけど、私が毎日家にいるっていうことで近くの子どもたちが来るようになって、みんなでおやつ食べたりしてました。7人ぐらいいたのかな、うちの近所に子どもが。だから、（大人になった彼らに）「みんなで廣畑家のおやつ食べて育った」とか言われると、それも良かったなと思って。大したものを作ってないんだよ。おにぎり作っておくとか、何かそんなことをやって。だんだん自分もエスカレートして、急にスイカ食べようかとか思ったり、子どもたちと壁に落書きする会とか、そんなことやりながら1年間うちにいました。今でもその子どもたちがあの時の思い出話をするんですよ。うちの次男の名前が「和洋（かずひろ）」っていうんですけど、そういうこと、今でも話します。だから、私の人生の中でも、働かないでうちにいたあの1年間は宝物。ただ、だんだん面倒くさい親になっていくんですけど。そういうことで、子どもたちにとってあの時の他の子どもたちと交わっていろいろするっていう経験はとても良かったなと思うし。彼の中でも（家に）誰がいるとか、誰のうちに遊びに行くとか、そういうのを初めてやったわけですよ。だって保育所に行って、後はずっとおばちゃんちに行ってとか、うちで過ごす時間がすごく少なかったから。

—和洋さんにご兄弟は。

廣畑：10歳離れてる兄が1人。下の子が生まれる時、（上の子は）お母さんがうちにいる時間長いんだよ。だから、上の子は下の子が生まれる時のことを何となく覚えてるし、お母さんが家にいる時間っていうのがあって、密に話すことができるんだよ。ところが下の子は、お母さんが働いていると長く家にいるっていう時間がないんだよ。下の子は、お兄ちゃんがお母さんと密に時間を、自分が生まれる時に過ごしているってことは知らないわけで。だから、そこは上の子がお母さんと過ごした時間が長い分、下の子にちょっとだけ優しくしてあ

げてって思うんですけど。下の子にとって、お母さんやお父さん、誰でも、働いてる人と一緒に濃い時間とか話す時間をたくさん持つってというのは、なかなか難しいんだなっていうことを思います。

—子育てをされてきた上で大事にしてきたことはありますか。

廣畑：子育てしてる時って一生懸命で、何が大事だかわからなかった、生きることで精いっぱい。ただ、うちのみんなで言っていることは、(貧しい中でも)おなかすいたっていうのと寒いっていうのだけがないように生活しようって。お金で貧乏っていうことを測れなくて、その価値観が大切だっていう話をずっとしてました。だから、何億持っても毎日おなかすいて毎日寒い思いしてたら、それは貧乏っていうんだぞって。貧乏の定義は、私たちずっと大切にしています。だから、そうならないような生活をしよう。

2. 震災の記憶

★一番に頭をよぎったこと

『ここからは、2011年3月11日以降のことを伺いました。』

—2011年の3月11日時点では、お住まいはどちらでしたか。

廣畑：小高の自宅。海から500メートルぐらいのところに住んでいました。小高区蛭沢(エビスワ)っていう行政区でしたね。

—震災当時は、お仕事はされていましたか。

廣畑：3月11日までは普通に仕事をしていました。次男が6年生か中学校に入る寸前に、大熊町にある印刷会社に私は就職をして。2013年3月31日までそこで働きました。

—震災当日は大熊町で被災されたのですね。被災後、どうされたのですか。

廣畑：その当時、和洋は、小高工業高校(現：産業技術高校)っていう学校に通ってました。春休みなのに補習か部活で学校に行かなきゃならなくて、朝、出かけて行って、私も仕事に出かけました。そして、14時46分一番最初にけたたましく携帯が鳴る音がした。その当時の緊急地震速報はけたたましく携帯が鳴ったよね。すごい音。何が起こったのか分かりませんでしたけど、「お前、携帯鳴ってるぞ」って言われて、「いやいやお前の鳴ってるね」とか言ったら自分のも鳴り出したりして。そして、その音が消えるか消えないかのうち、ガーって揺れ出した。もう最初はパソコンを押さえようと思って。次は棚を押さえようかと思ったけど押さえられなくて、地面にはいつくばるような、そんな感じでした。当時私の仕事はデータベースの管理だったんだけど。私は本当に仕事人間だったから、データベースのこと

とか明日のお客さまの対応が頭に浮かぶと思ったけど、私の頭によぎったのは、高校2年生の息子でした。「あれ？今朝、学校に行って、今ごろ14時半から15時半の間って、自転車こいでうちに帰ってる時間だな」と思ったんですよ。それで、「あれ？やつは今どこにいる？」と思いました。職場のみんなも避難するって言ってました。私は一目散に帰ろうと思いました。「彼に会いたい。彼を確かめたい」と思ったんです。だから、(浪江町の)請戸小学校の前の道路に向かったんですよ、大熊町から。なぜなら近道だから。普通は小高から大体30分ぐらいかけて帰るんだけど。そして5分も走ったら、みんなそこ行こうとするから渋滞なのよ。その間も彼に電話をかけ続けました。けど、全然つながらない。もう待ってられない。だから5分ぐらい待って引き返したんです。そして国道に出て、北に向かう国道をもう1回行こうとしました。1キロぐらい行ったら橋のところが割れてたの。だから、乗り越えることができなかつたんです。これは駄目だなと思って、大熊町から今度、山側の道路に向かいました。途中もちょっと危なかったり、割れてたりいろいろありましたけど。今、高速道路ありますけど、それよりもっと西側のところに山麓線(県道35号いわき浪江線)っていう道路が走っていて、その道路に向かったんです。その間も彼に電話をかけましたが、やっぱり通じないんです。何でつながらないのか分かんないです。何でこんな時に電話切ってたとか思いながら彼の名前呼んで、どこにいるってもう車の中で、1人で大騒ぎ。

—大変だったのですね。

廣畑：ラジオからは「津波が」とか「地震がまた来る」とか、そんなことがどんどん流れてきます。津波なんて10センチぐらいしかどうせ来ないとか思ってなかつたですよ。双葉町まで行ったら高架が下りてて、仕方ないからそこをぐるっと回って田んぼのあぜ道を走りながら、やっともう1回山麓線に戻って、そして、浪江まで来てもう1回海側に戻りました。なぜなら、海側の国道に戻らないと海側の自宅に行けないからです。国道にもう1回出て、浪江から国道6号線をまた北に向かいました。1キロぐらい走ったら開けてきて、海側見えるんですね。海側見た時に何か変だなと思ったんです。けど、何が変だか全然気が付きませんでした。息子は全く電話出ないし、「どうしてんだ、何やってんだ」って思いながら。そして、自分のうちに右折するガソリンスタンドのところまでやってきました。そしたら向こうからゆっくり、津波がやってきました。ひたひたでした。サーって。あっと思ったらガソリンスタンドから人が出てきて、「危ないから行っちゃ駄目だ」って言われて大騒ぎしました。「この津波のどこ、彼は自転車こいでるんだ。自転車でこれ無理なんじゃねえ」って思って。でも、うちに行くまでの道路は少し高台だから、「高台だけ通っていけば自分のうちに行けるかな」と、その時頭をよぎりました。だから、そっちに車を向けて高台の道路を通って、これは自転車では無理だわと思いつつ、私は彼に会いたいと思いました。自宅から200メートルのところまで車で行けたんです。そこに車を置いて、自分の家の方を見ました。そしたら、家はあつたんです。15時46分ぐらいだったと思います。後から聞いたら、津波は15時42分ぐらいだったんじゃないかっていつてますね(15時35分鹿島区、15時40

分原町区で津波第一波到達確認)。だから、自宅から 200 メートルの間は津波でいろんなものが流されたところに立ったんです、私。これは何だって最初思いました。津波だって分かっているけど何だと。取りあえず家に帰ろうって、その 200 メートルを歩き始めました。そして途中まで来たら、人間だったら手を差し伸べるでしょうっていう状況だったけど、私はそこに手を差し伸べることはできませんでした。そして、そこで手を合わせて。言葉にはならないような状況がたくさんあって。これは自転車では無理だなと思いました。だって、自転車とか車がもう木っ端みじんになってずっと置いてるんだもん。自転車で帰ってきてるはずの彼も無理かなって思った。何か確信のような気持ちになりました。自宅の前は、津波の潮が引いた後まだ水がじゃぶじゃぶあって、無理だ、無理だなという、ただそんな独り言みたいなことを言いながら、うちに上っていったんです。

—ご自宅は大丈夫でしたか。

廣畑：家は海拔 7 メートルのところにありました。津波は見た感じだと 4 メートルぐらいだったんじゃないかと思うな。私の隣の家とかは（津波が）抜けてたんだけど、自分の家は無事だったんです。坂道を上って行って玄関見て、そこで黙ってぼーとしてたら、ガラガラって玄関開いたの。息子だった。14 時半から 15 時半の間は自転車こいでるはずだから、津波ぴったりの時間だったんですね。私、その場所にへたり込んでしまいました。そしてたら彼は、そのままつかつかって歩いてきて、「お母さん、お帰り。すぐに戻って 3,000 円払ってきて」って言いました。よくよく話を聞いてみたら、彼は朝、学校に行く時、自転車がパンクしちゃったんだって。それで遅刻したもんだから補習に間に合わなくて、先生に怒られたんだって。部活も結局遅刻してつたから、また怒られたんだって。剣道部だったから、しごきは結構きつかったって言ってました。剣道着を洗濯してから帰らないといけなくて、洗濯機の前に立ってたら、先生に「お前、今日、何ぐずぐず、だらだらやってんだ」ってまた怒られたそうなんですよ。「今日の洗濯は 1 年生に任せて、お前、自転車直して帰れ」って言われたんだって。普通は洗濯が終わってから帰るから、早くても学校を出るのは 14 時なんだって。ところが、彼は 13 時に帰れて言われたから、そのまま自転車屋さんで自転車を直してもらったんだね。そして帰る時に、自転車屋さんのおじさんに「今日中に 3,000 円（パンクの修理代）持ってこいよ」って言われたそうなんです。地震は怖かったけど、おじさんの顔のほうがもっと怖かったのかもしれない。だから、私の顔を見た瞬間に、「3,000 円払ってきて」って言ったんです。私の 1 日、その瞬間はこんな感じでした。

★分からないことは素晴らしいことだと気づいた

廣畑：考えてみると、（震災当日は）彼は自転車がパンクしちゃって遅刻したりいろいろあって、自分の思うようにならない 1 日だったんですね。ずっと怒られっぱなし。一方私も地震の後海側通って帰りたかったんだけど帰れなかったんですよ。こうやって考えてみると、

自分の思い通りになったのは、その日は何もないんですよ。だけど、私たち2人とも自分の思い通りにならなかったおかげで生きてるんだな。もし自転車がパンクしてなかったら、たぶん帰りの時間が津波にびったり（重なってしまっていた）。私も海側の道路を待っていたら、たぶん時間的に津波にびったり。だから、計画通りにいくっていうことも大切かもしれないけど、自分の思い通りにいかないことっていうのも、もしかしたら何か遠い先の良いことにつながる可能性があるから。もし何かに今すごく悩んでいたら、それを越えた先を楽しむことを考えて、一回置くことをお勧めします。この先どうなるか分かんないけど、ずっと悩み続けてるんだったら、一回置いて考えない日を1日つくる。1週間考えたけど何も答えが出ないっていう日が、私たち、震災の時にいっぱいありました。だから、私が今その時の自分に言ってあげたいのは、「その悩み、一回置いて見たらどうだ」って。そして、1日だけ考えない日をつくって。1週間考えて答え出ないんだから、1日考えないで次の日から考えたって変わらないかもしんないじゃん。だったら一回置いて、自分を整えて、ゆっくりご飯を食べたり、楽しいものを見たりして、頭を一回リセットすることをお勧めします。そして、もう一回次の日の朝から考えればいいんじゃないかな。私たちは3・11の時、何もうまくいかなかったけど、津波が来るっていうのを最初から分かっていたら、わざわざ海側の道路に行かないです。次のことは分からないのは当たり前なんだよ。1月の時に3・11に地震が来るって分かっていたら、わざわざその日のために家建てますか。建てないよね。だから、未来のことは分からないんです。でも、分からないってことは、次に一步を出すってことだから素晴らしいことなんだ。そういうこと大切にしていってほしいなと思う。あんまり考えなくてもいいぞって。今あることが素晴らしいんだ。目の前のことを大切にすることです。

—なるほど。

廣畑：私たちはその夜、(福浦)小学校に避難したんだけど、覚えてるのは、お父さんを探す子どもの声と子どもを探すお母さんの声でした。それと、たき火。そこら辺からいろんなものを持ち出して火をたいてる音と、静かに歩いて「うちのお母さん見ませんでしたか」っていう子どもの声とか、そういうことをずっと聞いている夜でした。ほんとにずっと揺れてたから、寒いんだか怖いんだか、なんだかよく分かんない状態で車の中でじーっとしてた。その時の車の中は、次男の小学校の頃と同級生と私とで3人だった。(次男とその同級生は)そんなに小学校の時は特別に仲よしじゃなかったんだよな。けども、その夜、2人はずっと一緒にいたんだよね。そして今も隣同士で住んでんの。不思議だよな。その子はマコちゃん(誠さん)っていうんだけど、まさか(今になっても)ずっとマコちゃんと一緒にいるなんて、小学校、中学校の時は思わなかったですよ。だから、何があるかって分かんない。分かんないことの方が多いんだから、分かったふりだったんだなってちょっと思った。これが3・11の夜です。ただ、あの時のお父さんを探す子どもの声は自分の中ですごく辛くて、もう車ん中にいるしかないなと思った。

—避難中、原子力発電所のことは考えましたか。

廣畑：3月11日は考えなかった。12日になって、あれ？って思ってきた。12日のお昼までは、これどうなんだっていうぐらいしか思わなかった。ニュースは流してないだよ、福島県内で（12日15時36分1号機が水素爆発、それまで爆発の可能性についての言及はなかった）。この辺の地域の人に原発に行ってる人たちがいっぱいいたから、ささやくように、「原発大丈夫かな」っていうぐらいでした。大切なことはニュースで言わないからね。

—これまで、原発事故のことを想定されたことはありましたか。

廣畑：まさかこんなことになるとは思わなかった。ただ、原発に仕事に行ってる人が、4号機の話はよくしてました。今、4号機の上は使用済み核燃料でいっぱいなんだけど、「あれ大丈夫かな」って。

—避難所の中でそういう話を聞いたのですか。

廣畑：そうそう。それもささやくような。だから、12日の夕方かな。「小高から出てください」って言われて石神中学校に行くんだけど、一晩過ぎたら、昨日隣に寝ていた人たちがいないのよ。「え、何で？」って思った。後から聞いた話を付け加えると、当時の私は知らなかったけど、いなくなった人たちは、他の人に原発危ないぞという話をすると、みんなパニックになったり、混んで渋滞になったりして逃げられなくなるからって黙って出てこいって言われたそうなんです。その避難所の中では、行政に聞いても誰も答えを持っていないから、この先どうしたらいいんだとか、そんなことをたくさん話してましたね。避難所の中はもう不思議な空気。

—そこからどのように避難する判断をされたのですか。

廣畑：まず、石神中学校にいて、（周りの人が）次々いなくなっちゃったんで、私たちはどこに行ったらいいかよく分からなくて。そしたら12日に「飯館村は普通に生活できるから来い」って友達に言われたんですね。だからとりあえず、飯館村のいちばん館（いいたて活性化センターいちばん館）っていうところに私は行きました。それが3月14日かな。順番整理すると、まず福浦小に行って、12日の朝に「小高中に行ってください」って言われて、その日の夕方に石神中に行って。だけど、原発が危ないから「20キロ圏外に出てください」って言われて。でも、その時はほんとに爆発するかはもちろん分かってない。ただみんな「音を聞いた」って言ってました。「あれって何だったんだ」みたいな。ボンっていう音。

3. 震災の経験を通して今大切にしていること

★避難中の印象的な出来事から得た教訓

廣畑：私が絶対忘れないって思ってることがあって。私、石神中学校に行った時が遅いから、体育館の踊り場みたいなちょっと高いところしか空いてなくて、そこにとりあえず 2 人で避難したんだよね。そこから下を見ると、人が畳 1 畳ぐらいのところにすし詰め状態。あのぐらいの（狭さの）ところに、お金持ちも、どっかの社長さんも、どっかの偉い議員さんも何もかも、みんな畳 1 畳あるかないかのところにすし詰め。子犬を抱いた人、子どもを抱いた人、寝たきりの人をやっと連れてきたような人もいた。

—そうだったのですね。

廣畑：あの踊り場から、「本当に困った、どうしたらいいか分からないっていう状態の時に大切なものは何か」を見たような気がする。私はその時に本当に、お互いを感じながら生きるっていうことを大切にしようと思った。今しかないっていうか。喧嘩して家出てったうちの叔母さんと叔父さんが、怖くて 2 人でくっついている姿も見ると。だから、大切なものをいつも感じるっていうことをしないといけないなと思いました。お金とかそういうことじゃなくて。そこが大切だなと思った日でしたね。

—なるほど。

廣畑：そして、自分のご飯は自分で守れって私は言いたくて。（小高）中学校に行った時に「年齢が上の人たちからおにぎり配る」って言われたんですね。だから年寄りから配っていったんだけど、その当時 52 歳の私の前でなくなりました。次は「今度はさっきもらわなかった、ちっちゃい子どもから配ります」って言われました。そしたら 15 歳で終わりました。17 歳の息子のところにも、52 歳の私のところにも、おにぎりの順番は来ませんでした。当たり前だなって。次の石神中では「家族 1 人ずつ取りに来い」っていう感じで、やっぱり年齢順。そしたら、やっぱりうちの息子のあと 5 人ぐらいの前で終わった。（息子は）「お母さん、僕はもう並ぶのはやめました」って言いました。

—切ないですね。

廣畑：そして、飯舘村に行ってみたら、飯舘の避難所運営は完璧でした。私はもうほんとに、当時の村長さんに会ったら絶対お礼を言いたいぐらい。避難所って、行ったら必ず名前を書くんですよ。「何歳と何歳、無事です」とか、履歴とか分かるように書くんですね。だから、私たちも書いてたんです。そしたら名前書いた瞬間に、人数分おにぎりを渡してくれるんですよ。食べてないとか、食べてるとか、そういうこと関係なく、来た人は必ずおにぎりももらえる。だからその日、14 日の夜でしたか、初めてご飯を食べられたんです。11 日からず

っとほとんど、食事らしい食事はなしでした。

—そうだったのですね。

廣畑：だけど、避難所の外に出た時に飯舘村の人たちの言葉がもう本当に悲しかった。外で村人たちが「俺たち、ずっとここにいていいんだろうか」っていう会話をしてました。避難所通いしてるんだよ、みんな。そして、そこでは白い防護服みたいのを着た人たちがずっと何か測ってるのよ。見たことなかったから「何だ、この怪しい人たちは」と思いました。そこで何やってるかは誰も分かんないですよ。またここで教訓。大切なことは目の前で起こってるけど、ニュースでは言わない。後から飯舘がすごく（線量が）高かったってのが分かるけど、まだその時点では誰も知らない。だから、そうやって測ってるのを見ても怪しい人たちだなんてしか思わなかったですよ。

—そこからの避難の流れを教えてくださいませんか。

廣畑：「30キロ圏外に出てください」って言われたけど、うちの叔母さんがまだ石神小学校にいたんだよね。でも、津波被災で車持ってないから、叔母さんとかみんなはもう避難できないんです。なので、私が迎えに行きました。そしたら、もう畳1畳ぐらいで済んでたところが、畳半畳ぐらいに1人になってました。小高だけではなくて、双葉町とか浪江町とかからも来るから人があふれてて。だから、叔母さんがどこにいるかももう分かんなくて、ぐるぐる体育館の中をずっと探してた。叔母さんを見つけて連れて、そこから福島市に行きました。それが、16日か17日かそのぐらい。土湯のフルーツラインのほうに研修施設があって、そこが避難所っていうか開放されてたのでそこに行きました。

—飯舘から福島市に行こうとしたのはなぜですか。

廣畑：うちの叔母の孫が福島市に先に避難していて。「今日の21時までに来れば入れる」って言われたので行きました。

—福島市内の避難先へ向かう道は混んでいましたか。

廣畑：混んでました。ずっと。小高から原町行く時も。みんなやっぱり原発からとにかく遠い方向に行って。だから、逆向きはほとんど走ってないみたいなそういう感じ。そして、着いた時にここは原発から何キロっていう話ずっとしてましたね、確か。飯舘は、「ここ半径40キロだか50キロだから大丈夫だべ」って。福島市に行ったら、「ここ半径70キロだから大丈夫だべ」みたいな話をしてて。

4. 震災後の活動

★自然の営み

—小高へはいつ頃戻られたのですか。

廣畑：小高は避難指示解除になるまで2012年4月から2016年7月までずっと、日中だけ入れるけど宿泊はできないっていう場所になったんだよね。(小高区は2012年4月から避難指示解除準備区域に再編)だから、私は2012年ごろから小高に通うようになりました。そしてその夏、自分の家に行ったんだよね。そしたら、マリーゴールドの花が咲いてた。これは2010年に自分がホームセンターで買って植えた花の種だなと思いました。そして、2011年、誰もいないところで花を咲かして、2012年、私が行った時にもう一回花を咲かせてるんだなって。私は震災からそこまで色を感じることがなかったんです。グレーの町、グレーの自分と、毎日の生活がグレーに感じていました。でもその花を見て「うわ、何だろう」と。「自然は強いな」と思いました。誰もいないところで種をこぼして、誰もいないところで咲かせて、そして、2012年にまた咲いて。私たちが鬱々(うつうつ)としている間にも、ちゃんと自然の営みはきちっとできてる。それに私は感動しました。それがきっかけで2013年から花作りを始めたんです。

—仮設住宅の敷地にビニールハウスを造ったのですか。

廣畑：そうなんです。まずは、さっきのマリーゴールドを作りたいと思ったんですよね。だけど「仮設住宅で4畳半2間しかないのに、お前、何考えてんだ」ってみんなに言われました。ただ「ここ1年いるけど、隣の農地が使われてないな」と気づいて。「荒れてるし、どうせ使わないんだったら、その農地借りれるんじゃないの」と思ったんです。いろんな人に聞きながら大家さんを探して、(大家さんから)OKをもらったので、土地の西側の仮設住宅の人に一応挨拶に行きました。「ここで今からビニールハウス建てますから、うるさくしてすみません」って。そしたらその自治会長さんが「そこは子どもの遊び場にしたいから、俺たち借りようと思ってたんだ」って言ったんです。「その後ろは空いてるんで、そこにどうぞ」って言われて。そして今度は東側の仮設住宅の人に挨拶に行きました。そしたらその自治会長さんも「いや、そこは公園みたいに散歩する場所にしたいなと思ってたんだ、俺たち」と。みんな理想がある。「はあ」と思いましたよ。でも「分かりました、じゃ、その後ろにします」って、大体300坪ずつ後ろに下がって行って、一番後ろになりました。でも良かったなと思いますよ。私、仮設住宅に入ったのが一番最後ぐらいだから、(そこには)知らない人しかいないんですよ。でも、とりあえずそうやって話をしていくことで、知らない人たちに廣畑っていう人を分かっていたりすることができたんです、おかげさまで。そして、会社を辞める退職金でそこにビニールハウスを建てました。

—仮設住宅には誰も知り合いはいなかったのですか。

廣畑：そうですね。知ってるのがその時津波で一緒に避難したマコちゃんのお母さんだけ。私がいたところが相馬の取り壊し物件だったわけで、出なきゃいけない。そしたら（マコちゃんのお母さんに）「何か知らないけどうちの隣の仮設空いてっど」って言われて。役所に聞きに行ったら「風呂のドアが壊れてるから誰も入らなかったんだ」って。「そのうち直してくれんならそれでいいや」っていうことで、次男と二人でそこに入ることができたんです。

—花を作りながら、そこで人との交流はありましたか。

廣畑：私、朝7時半にビニールハウスで花を作り始めるんだけど、8時半になると決まって仮設住宅の70代、80代の人暇になるから散歩にやってくるんです。ビニールハウスの中をうろうろ見て「何だ、これ。何やってんだ」みたいなのを遠くで言ってるのが聞こえた。

—興味があったんでしょうか。

廣畑：分かんないな。ただ私は、インターネットに書いてあるから大概のことできると思いました。ビニールハウス造ったし。インターネットに種のまき方も書いてあるし、水の温度管理もできるって書いてあったし、どうすればいいって書いてあったからそのとおりにやっていたんですけど、その人たちが出てきて、何だ、これみたいなことを言うわけです。1カ月ぐらいしたら、インターネットの通りにやってんのに枯れてきたんだよ。何だ？と思いました。私は会社員長いから、温度管理何度で、今日は水かけ何時にやったっていうチェックシートを作ってたんです。そうしていたら枯れてきて、おかしいなと思って何回もやり直したり、いろいろしてたんです。いつもの通りやって朝7時半に行くと、なぜかビニールハウスが窓を開け放たれて、水かけ終わってんですよ。どうした？と思いました。そしたら、駄目なやつがこっちの方に全部まとめて捨ててあるのよ。誰だ、人のやってるやつ捨てたやつと思ったんですけど、何で駄目なのかも分かんないから。そして、いつもの8時半からになるとまた散歩にやってきて、またごちゃごちゃ言うんだろなと思いつつ。そしたら、今度はうろうろする前に私に向かってやってきました。そして言ったのが、お前、今ごろから水かけしちや駄目だって言うんです、7時半に。この花はお日さま出る前に水をもらってお日さま出てから育ち始める種だから、そんな7時半ごろから水かけて、みたいな。何だ、この人たちはと思いましたよ。よく話を聞いてみたら、昔、花農家さんとか苗農家さんだったのね、知らなかったけど。私は、自分で作ったものを町の直売所に行って夕飯のおかず代ぐらいになればいいなと思ってたんです。電卓はじくと大体おかず代になって、このぐらいなら亭主の給料もあるから生活できると思ってただけで、その人たちにその話をしたら、そんなことやっちゃ駄目だって言うんです。市場に出せと。市場に出すまで3年かかるって言われてる時に無理だよと思ったら、その人たちがやり方を次々言うもんだから。「市場の契約の仕方はこうだ」、「トラックはここに頼めばいいんだ」、「口座の開設はこの銀行は駄目だ

からこの銀行に口座つくってこい」とか。そういうことを全部教えてくれて。半年後には、私、仙台の市場に花を出荷する人になってました。花農家デビュー。自分のこの性格も、無謀だっていう性格もあるんだけど、目の前に起こることって何が何だか分かんないけど、取りあえずやってみるっていいなって思ったぐらい。

—その経験から学んだことはありますか。

廣畑：3年間やるんだけど、結局、退職金の分は返ってきませんでした。多額のマイナスです。だから結局、日当も出ないし。だけど、その経験があったから持続するっていうことは大変だかっていうことを。身に染みて会社員っていいなと思いましたし、自分でやるっていうのは大変だなのも思ったし。ただ、持続するためには必ず儲かないと駄目だ。だから、「とうがらし」をやる時に、やり始めて最初の頃は何となく始まっちゃったんだけど、でも持続するためには、花づくりの時の失敗っていうか、どうすればいいかっていうのを何となく覚えちゃったんだな。だから、それをもとに、その上で必ず利益を出すっていうこと。持続するためには何が必要かっていうことをきちっと組み立てられたような気がします。だから、失敗とかそういう、みんなすごくどきどきする時点で次のことできないかもしれないけど。一番最初にも言ったけど、これやったら失敗するって分かってるっていうことは、もう対策もできてるっていうことだからね。これやったらって、これをやんなきゃいいっていう対策案ができてるわけだから、失敗するか、次に移れないっていうことは、失敗っていう言葉は多分ほんとは要らないことなんじゃないかと。なぜなら、それはずっと先の、何十年とか何十年後に、あの経験があったからここに来たっていうふうなことに必ずなるような気がする。だから、「とうがらしプロジェクト」もうまくいっているかどうかなんて、私が決めることではないと思うんだな。自分で結果を失敗だって思うか思わないかっていうよりも、失敗を決めるのは、結局どんなことをやったとしても、多分自分じゃないんだっていうことは分かった。ずっと先に、その結果を人がどういうふうに見るかっていうことにしてもいいし、自分がどう感じるかっていうことにしてもいいし。だから、二十歳の時に感じたことを40歳の自分がどう感じるかって、40歳っていうことは、その経験があったから40歳になってんのよ。だから、そういうことで、失敗じゃなくてそれは経験値を積むっていうふうな考え方の転換のほうがいいかなと思う。

—「とうがらしプロジェクト」では、苗を販売して、買った人が育てたものを買って加工して販売するという方法を取っていると思いますが、どのようにこの仕組みを考えましたか。

廣畑：仕組みというか、花づくりの経験を考えると、どこで間違ったかを、どこで失敗したかをちょっと考えた。市場に出すっていう仕組みでやって、普通の流れでやっていけば、これは利益にならない。なぜならないかっていうことをどんどん考えていくと、買うものと出ていくのをちゃんと考えないといけないっていうこととか。人にやってもらうっていうこ

とは、みんなボランティアで手伝ってくれてたのよ。でもこれも違うなと思ったり。だから、そういうところを一つ一つ見直した結果から生まれてるなと思うんですけど。ただ、「とうがらしプロジェクト」の成り立ちとして、私がまず種を買って用意します。種を農家さんに渡して、それを農家さんが育ててくれて、60円で買い戻すのね。そして、それを100円で販売するの。「40円プラスになるぞ」と。苗ってホームセンターで買っても100円ぐらいだ。その100円で買ったものを育ててもらって、それを農家さんから買い戻すんだけど、その時の金額も、ネットでとうがらしって1キロ1,000円ぐらいで売ってんですよ。ネットで1,000円っていうことは農家さんから幾らで仕入れてんだと思いますけど、小高工房では1キロ5,000円以上で買う。ネットで1,000円で売ってるものを農家さんから5,000円で買うんだ。仕組み考えたら、農家さんが1,000円出してこれ作ってほしいというのとやると、作りたくないって言った。誰も喜ばない日本の農業って何だろうと思いました。大変だもん。だから、仕組みの中にやっぱりみんなが、誰もが喜んでやる仕組みが必要だ。市場に出したらキロ2,000円とか3,000円ぐらいで取引するものを、小高工房に出したら5,000円以上だぞって。まずそれも大事だよ。だから、どこをとっても誰も悲しむ作業があっては駄目だなと思うんですよ。ボランティアに花作ってもらっててお金払えないなんて、それは仕事って言わないよね。仕事なんだから農家さんが、家庭菜園じゃねえんだから、利益が出ないといけない。利益を出すっていうことは次につながる原資にもなるし、そこを大切にしないといけないっていうふうに思ったわけです。だから、そこをちゃんと組み立ててたら、今の形になった。誰も喜ばない農業とか、誰も喜ばない商売って、おかしいと思わない人のほうが不思議だよ。働いても、働いても、何か変みたい。それ、何につながってるか全然分かんないよりも、これやったら、例えばお金もそうだし、それでいろんなものがつながっていくわけだから、そこを大切にしようと思った。その仕組みを回していくことで、小高工房の中で私の役割というもの考えるけど、必ず利益を出さなきゃなんないからいろんなことを考えないといけないし。それで農家さんに5,000円払うためには、もっと付加価値のあるものを作っていくっていうことをやっていくっていうことを自分の使命にしてやっていけばいいかなと思った。

★とうがらしをつくるようになったきっかけ

—なぜとうがらしに注目するようになったのですか。

廣畑：2016年に避難指示解除になって最初に帰ってきた人とか住み始めた人は386人って言われました。13,000人分（震災前）の386人か、みたいな話されてましたけど、これはゼロから386人だよ。だって（避難で）ゼロになったんだ。そして、みんなが話してる内容っていうのは、帰ってきたはいいけど、誰がどこにいるか分かんないっていう問題。家は残ってんのけどどのうちに電気つくか分かんないんだもん。だから、夕方になったら外に行っどどのうちに電気つくか見るんだとか。そして、「明日の朝行くんだ」みたいな話もしてま

した。それから、作った野菜が動物たちに食べられるっていう問題が発生しました。5年半みんな住んでない町。自分の、今、皆さんが出身地のところで5年半住んでなかったら町どうなるかっていうのは、今でも見る事ができる地域がありますからぜひ見てほしいけど、そうすると、もう動物たちの世界だよ。だから、「おだかぶらっとほ一む」をやってる時に、その町に届け出さなきゃなんなくて、届け出のために町の区役所に行って、帰ろうと思って振り返ったら、窓の外にサルが20匹ぐらいこっち見てるの。だって、彼らの住んでた5年間だから、人間が住んでないから。人が夜いないっていうことは、もう彼らの世界になっているから、そこで野菜作り始めてたら彼らのご飯作ってるのと一緒にだよ。食べ放題だったんだもん、今まで。栗でも何でも。向こうから20匹に見られた時の私の気持ちも考えて。うわーっと思って、動物園のお客さんはサルですよ。見られるのは人間っていうそんな感じです。だから、作ったものを動物たちは自由に食べてたんですよ。その時は静かにそこから逃げて帰ってきたんですけどね。その時私は、農家さんに「どうせ作っても食べられるから、もう食べられる前にトウモロコシあげるから取りに来い」って言われたんですよ。だから、私は農家さんの畑に取りに行きました。その年の夏ぐらいですけど、行ったら、ハクビシンは頭がいいよね。ちゃんとむいておいしいの食べる。一番いい時にちゃんと食べるんだなって。サルは持ち帰るんですけど。

—そうなんですね。

廣畑：だから、みんな倒されたり穴開いてたりするんです。イノシシは掘っていくし。自分がトウモロコシをもらって帰ろうと思って、ずっと下の細いほうの20本ぐらい採って帰ろうと思ったんですよ。そうして畑を出ようと思った時、一番畑の隅に全然やられてない無傷の野菜がとうがらしでした。サルに聞いたことないけど、多分とうがらし嫌いなんだな。ハクビシンも食べなくなかったんだな。聞いたことないから分かんないけど。この辺の地方では、自分ちで食べるために1本とか2本作るんです。わざわざ買うよりもっていうことで。だから、その1本2本のやつで、やられてないのはとうがらしだったんで、見た時にこれ大丈夫なんじゃないのと思ったんです。だから、これ作ってみようかと思ったんだけど、次の年、農家さんに行って、「とうがらし去年やられてねえから作って？」って言ったら、そんなもの作らないと言われました。農家さんだから、さっきも話したけど、やっぱり利益が大事。売って初めて、お金に変わって初めて農家さん。「家庭菜園じゃねえんだから」と言われちゃって。何で駄目だって言ったかっていうと、放射能が出るから作っても無駄っていうのと、とうがらしなんて売れないっていうことを言われました。でも作ってもみなきゃ分かんないから、私は15本の苗を彼に持って渡して、放射能が本当に出るかどうかわからないと分かんないじゃんと言って、プランターと路地と両方植えたんです。そして、それを全部収穫して、9月の頭ぐらいですか、全部放射線測定してみました。測定センターに持って行って測って見たら、どっちも出ないじゃん。そして、測ってくれた人に、「これは売ってもいいんですか」って聞いたんです。そしたら、「出ないものは売っていい」って。なので

私たちはそれをすぐに町の復興マルシェで売り始めました。そこから始まったのが「とうがらしプロジェクト」。



—今とうがらし以外に育ててみたい作物はありますか。

廣畑：今はマスタードをやって「大蛇のわるだくみ」っていう商品を作りました。“粒マスタード”っていうのと、“粒入りマスタード”っていうのと、“マスタード”って、全部違うんです。うちは粒マスタードです。黄からし菜から作るっていうのを今やってるんですけどね。やってみたくて始めたんだけど、これが（大変）。日本の和がらしの食品表示を見てください。あれ、カナダ産とか書いてあるから。和がらしなのに原材料でカナダ産って残念な感じがするでしょう。何でかなと思いました。それで原材料から自分で作ってみたいなと。でも実際作ってみたらこんな大変な作物はなかった。育てるのが大変。これは日本でみんな作なくなる気持ち、すごく分かるなって。山形と、長野と、日本でも幾らかは作ってんだよ。新潟も作ってたかもしんない。ほんとに微量だけど。ただ、大手のもので日本産で作ってるマスタードって売ってないから。黄からし菜自体を作るのには手はかかんないです。菜種と一緒にですから。種まいたら花咲くまで放っときゃいいんです。ところが、何が大変かって、それと菜種の種類はいろんな種類がすぐに混ざっちゃうの。だから、次の年も同じ黄からし菜になるっていう保証がないのがまず1つ。逆に言うと、菜種油とか菜の花プロジェクトとかやってるけど、あれにからし菜の種子が、花粉が付くともう駄目なのよ。逆も同じ。だから、被災地って言われる浜通りはとていいんじゃない。今はまだ野菜を作っ

いる農家が少ないから。だからうちもすごい離れたとこでやったんだけど。だから、まず混生するっていう問題があって、毎年大変。それから、刈り取りしてそれを選別するのがまた大変なの。菜種で油を搾るわけじゃなくてマスタードにするためのやつは、まだちょっと、大きさとかあれもあるし、いろんなことが大変で、これは全然利益に結び付かない。マスタード大好きなんだけどね。1キロ、ネットで買うと2,000円ぐらいかな。でも、私たちが作ると最低でも4,000円から5,000円かかるから。あの大変な思いでずっと白い入れ物に入れて、ごみがないかって何度も繰り返し洗って、乾燥させてっていう工程が、ちょっとこれは農家がやる仕事じゃないな。工房がやっても、これはお客さまに出して大丈夫だっていうふうにして渡せるようになるまで、ごみの混入問題も大変。機械はあることはあるけど、それでも自分なりに完璧にして。でも聞いたら、完璧じゃないって言うんだな。あそこまでやっても。うちで今、「大蛇のわるだくみ」って粒マスタード作っていますが、あれだけやってもし何かクレーム来たら、もうしょうがないと思います。この検査をやって、光も当てて探知機やって、それでもうお客さまからクレームが来た時は、ごめんなさいってしか言いようがないぐらい。だから、やりたいけど、それは作り続けるのは難しいかもしれない。今ある分はとりあえずやったけど、それはやりたかったなと思うけどね。

—なるほど。

廣畑：あと、トマトもやりたかった。小高工房で加工用のトマトをやりたくて今年トマトを実験した。昔食べたおいしいトマトって売ってないよね。だから、あのおいしいトマトを食べたいと思って。それで、私はパスタ類が好きだから、アラビアータって辛いトマトソースを作ろうと。とうがらし屋なんで。でもトマトはとても難しくて。作るのは簡単なんですけど。加工してレトルトにしようとする、と、土壌菌っていう菌が、1回雨降ったらもう駄目だっていうぐらいすごいよ。今年作った100キロ分が急な雨で全部割れちゃったのね。雨降るともう終わりって言われてたのに、収穫まであと3日っていう時の2日前に雨で割れちゃったらもう終わり。加工用トマトは露地栽培の加工用トマトを目指してるわけ。有機栽培の露地栽培っていう。だから、もっとおいしいものをこのチームで考えられるなら、それでもおいしいものができればいいけど、トマトの味のしないトマトばかりで。私、トマトが本当に大好きなので、小高工房ではトマトを色々いっぱい作って、みんなに食べさせたいんです。そして本当のトマトの味を絶対知ってほしいなと。チャレンジやってます、色々。

★自分を見つけてほしい

『現在の小高工房の前身である、おだかぶらっとほ一むについても伺いました』

—2015年の9月に開所した「おだかぶらっとほ一む」ですが、みんなが集まれる場所を作ろうと思ったきっかけはなんですか。

廣畑：マリーゴールドの話に戻るけど、そのマリーゴールドを見て「自分しっかりしなくち

や」って思ったんです。それから小高に通うことにしたんだけど、結局はそこで人に会うことはなかったんです。2014年の小高なんて、夕方になったら怖くていけないぐらい、どこにも電気がつかなくて真っ暗。「みんなどこに行ったの？」と思いました。一度昔の友達の家に電話してみたんだけど「この電話はお客様の都合でおつなぎできません」って。そりゃ当たり前だな、みんな避難してるからってわかってるけど、電話してみるんですよ。ほんとに街の中は歩く人もいないし、電気もつかないし、友達に会う術はないんだよね。蜘蛛の子を散らしたようにみんなどこに行ったか分かんない。だから私は「ぶらっとほ一む」でずっと人を待ってようと思ったんです。そのうち、誰かが見つけてくれるかなって。いろんな人が「コミュニティースペースあって良かった」とかいろいろ言うけど、私、別に人のためにやってなくて。自分を見つけてほしい、友達に会いたいと思ったから作りました。

—ホームページに「小高のぶらっとほ一むはずっと続けようと思ってはいない」と書かれていましたが、今後の活動内容や最終目標はありますか。

廣畑：「ぶらっとほ一む」はもう2020年3月31日で閉じたんだけど、それは町の中で必要とされるだけあればいいというふうに思ったからなのね。始める勇気も大切だけど、やめる勇気の方がはるかに大きな勇気が必要だと思うんです。そもそも始まった時、私は人に会いたいと思って始めました。そして、人の集う場にいずれなってきました。良かったなと思いましたよ。あそこに行けば廣畑がいるっていうことになって、目標は達成しました。ただ、そのまんまやり続けている時にふと自分が考えたことは、これ必要悪もあるなって。あり続けることで駄目になる世界もあるって。だから、一番いいタイミングできれいな終わり方をするために、小高工房に転換することを2017年にもう考えてたんですね。2020年のコロナが始まるとか始まらないじゃなくて、その時をもって、町の中で自分がやる必要な機能は、多分これは終わっていいんじゃないかと思ってたんです。みんなは何で？って言うけど、依存が生まれるのも駄目だし。なぜなら、依存が生まれて、廣畑がいなくなったら生きていけない人が世の中にいたら困るじゃん。これ、会社の仕組みとずっと一緒。誰々に依存するっていうのは、やっぱり色んなものを作っていく時にある程度必要だけど、ある程度になったらさっと引くっていうことで、依存の体質を町の中からなくするっていうのも大切だと。そういうふうに思ったんです。「おだかぶらっとほ一む」の時の目的もそうだけど、このぐらいでできんだっていうみんなの空気ができて、とても良かったなと思ってらるんですね。おだかぶらっとほ一むつくった時、電気が来てただけで、水も出ないしトイレもないしみたいところで始めていた。それでもみんな充足したよねって。でも、その充足は人間の欲望の塊だから、充足したっていうことに気が付かない。そこが大事ななと思います。

—「ぶらっとほ一む」の活動や「とうがらしプロジェクト」などの活動をする上で一番大切にしていることは何ですか。

廣畑：自分は3.11の時に何を思ったかをやっぱり考えています。それまでの自分は365日

24 時間仕事人間でした。だけど、あの日自分の頭に浮かんだのは子どものことでした。不思議だなんて。だから、その日のことを絶対忘れないと思っています。そして、日々の大切なことは、今、自分のやってることで、一番近くにいる人が泣いてないこと。今ここに来てこうやってることで、大切な人が笑っていますか。仕事でも何でも、一番近くの人が喜んで、笑っている。それがやっぱり何をやる時も大切なことなんじゃないかなと思います。一番近くの人が常に泣いているような仕事って何だろうと思いますね。何のために仕事をしてるかっていうことをもう一回見つめ直してほしいと思うし、自分の一番近くにいる人とか、皆さんの一番大切な人とか、そういう人が笑っていることを大切にしてほしいなと思うんですね。私が小高に来ることも、ここで仕事をすることも、一番近くにいる人が行くなつて言って、その人が悲しい顔になってたらちょっとそれは違う。だから常に、少なくとも一番近くにいる人が喜んでいるか、笑っているか。そういうことを大切にしていっていいのかなと思います。仕事、生活、学校。どれでもそうだけど、仕事の上に生活が成り立っている訳ではないっていうこと。生活があって初めて仕事に乗ってくるんだなって。だから、生活がちゃんと安定することで、仕事の力が 100%じゃなくて 120%出る。どうやって考えてみても、生活がきちっとしてるから、120%の力が出せる時ってありますよね。それはやっぱりそういうことだなと思いました。



—「ぷらっとほ一む」や小高工場の活動について、和洋さんに相談はしましたか。

廣畑：相談はしないですよ。こんなことやってるっていう報告だけ。2011年、12年、13年って、うちの中真っ暗でした。それはもういろんなところからいろんな（批判の）矢が飛んできました。原発事故のこともそうだし、いろんなことで。そして、誰も笑ってない生活が続きました。どんなことをやっても身が入らないことが続いた時、一番大切なことを何となく分かったような気がしますね。それは家庭の中とか、自分の生活の中とか、自分が暗い時や、自分がどうしたらいいか分からないとかそういう時。今冷静に考えて私の中で言えることは、悲しみやどうしたらいいか分かんない時に一番隣の人が笑ってない、暗いということ。その時、自分の顔見たことあるかって私は言いますね。一番最初に自分の顔を見て。この話をする時私は、廣畑Aと廣畑Bの話します。廣畑Aが廣畑Bに対して隣の人が笑ってないって言うけど、廣畑AとBだったら一番近くににいるのは自分だよ。廣畑Aは廣畑Bに「お前、どうした。今日、大丈夫か。休んだらどうだ」ってちゃんと自分の中の、一番隣にいる自分という人に語りかけてみてください。そして、「お前、大丈夫じゃなかったら、今日休め」って自分で。「違うことを考えたほうがいいぞ、今日このことを考えないほうがいい」って、AとBがちゃんと会話する。それが大切なんじゃないかなと。そこからもう一歩外に出ていく。だから、廣畑Aと廣畑Bが「今日、お前、どうしたらいいか分かんないんだったら、一回1時間休んでから行け」って。ここで一回修復して、そして、世の中に出ていくってことをやったほうがいいかなと思いました。そこを大切に。一番隣の人を笑わせるとかその人と楽しく生活するためには、まず廣畑Aと廣畑Bをちゃんと整える。その作業が必要なんじゃないかな。

5. 現在、そして未来へ

★小高を選んだ人

—小高で生まれ育ち、震災から13年になる現在の小高をどのように思われますか。

廣畑：とてもいいなと思ってます。元々小高には約13,000人が住んでいたとか言いますが、震災から13年経って、（今、小高に住んでいる人たちは）みんな他の地域で生活することもできたんですよね。だけど、（今いるのは）避難指示解除になって小高を選んだ人たちですよ。そして、移住者も今いろんな人がいますけど、とりあえず小高に来てみて住むことに自分で決めたんですよね。誰かに指示されて来たわけでも何でもなくて。あと、ここから避難して違うところに行った人たちも、とりあえず小高に住むって自分で決めてやってきたわけです。どこでもいいが、もう小高しかないって思って来た人、いろんな人がいるかもしれないけど、とりあえず小高を考えてここに住み始めた人たちがそれだけいるっていうことはすてきじゃないですかね。0歳から104歳までいるけど、いるだけで町ってできていき

ますよね。だから、選んだ人。帰ってきた人っていう表現は全然違って、小高を選んだ人がいるっていう。それがとてもいい町だなんて、すてきだなと思うんですね。だから、何となく住んでも、それでも全然いいけど、そこを考えると町に、私はいつもいろんな人がいてすごくいいなと思うんですね。私、まちづくり委員会とかに呼ばれたりしましたが、その時思ったのは、これ、廣畑の意見で町なんかつくったら大変だよと思いました。そして、思い通りになったら、私は多分住まないと思いました。ここにあれがあって、あれで。つまらないもんね。もう分かり過ぎて。だって、あれ？何だ、こんなところにこんなやついた、みたいなのがあると、町ってクスッと笑えたり楽しんだりですけど、そういうことで初めて町ってできてくるかなと思いますね。2016年の避難指示解除になって10月ぐらい。来たんですね。暴走族と言っていいかどうかは分かりません。ただ、すごいバイクのバリバリっていう音のバイクが誰も来なくて静かだった町に、やってきました。避難指示解除になって何日かしたら、暴走族は嫌いだけど、初めて来て、暴走族のこと、私、拍手を送りたかったもん。うわーと思いましたけど、こういう人も普通に來れるっていうのが町なんだなと思いました。小高の中にいたら誰もいなくて静かだった。今も土日なんか結構静かなんですけど。空調の音すらしなかったですよ。静かなあの町に比べて、物音、人が生きてる、空調の音がするとか、そういうことですごく、今、町になりましたよね。ここにいて波の音が聞こえるっていうのが普通でしたから。まだ2014年だったらもう町ん中解体の音しか聞こえないみたいな、そんなところから、今、普通に空調の音聞こえるんですよ。だから、そういうふうなところに来たっていうことは、すごくいいんじゃないかなと思いますね。人の生活感がね。

★一日を大切に

—これからを担う若者に向けて、メッセージをお願いします。

廣畑：ひとつひとつ大切な時を無理せず、焦らず、あきらめず。

今日の夜ご飯を楽しみにするような一日を送ってください。

【学生の感想】

インタビューや活動を通して廣畑さんの人柄が素敵だと思いました。私とは違う考え方で、そういった見方もできるのだと印象に残っている言葉がたくさんあります。言葉一つひとつに廣畑さんの強さや優しさが表れていると感じました。失敗を活かして次に進むことは簡単なことではないけれど、自分が置かれている状況を素直に受け入れてみて、未来を肯定的に考えてみようと思いました。廣畑さんからは大切なことをたくさん教えていただきました。人として成長できたと思います。廣畑さんの言葉を胸にこれからを過ごしていきたいです。

行政政策学類1年 井上歩郁

インタビューや唐辛子の収穫作業を通して廣畑さんに震災前後や今後の活動についての貴重なお話をさせていただきました。事前に廣畑さん自身や活動について調べていましたが、やはり廣畑さん本人の口から聞く内容は言葉に重みがありました。廣畑さんは「どんなに困難な状況でも自分の一番大事な人、身近な人が笑っていたり、喜んでいたりすることが何よりも大切だ。」とおっしゃっていて、そのことは震災にかかわらず、人生においても大切だということを感じさせられました。また、廣畑さんのどんなにつらくても諦めないという前向きな姿勢を学ぶことができました。

経済経営学類 1年 田中希奈

私が特に印象に残っていることは、「行動するしかない、やらないと進まない状況でやってみる」という廣畑さんの強さと、「困ったと言ったらいつでも手を差し伸べてくれる人が町にいることは素敵なことだ」という小高の優しさに触れたことです。当時の出来事について直接お話を聞くことや、様々な活動を共にさせていただけることは、本当に貴重な経験でした。またアーカイブ活動をする中で、事実はもちろん、当時の感情やインタビューの人柄も同時に残すことの重要性を学びました。今回の活動を通して学んだことは今後も大切に、活かしていきたいです。

経済経営学類 1年 永井恵衣

共にさせていただいた活動の中で、廣畑さんは常に私たち、これから生きる人たちに伝えたいことを話してくださっているように感じました。廣畑さんの発言は全てが格言で、書ききれないほどです。震災の辛い経験も、そこから起こした行動も全て自分の糧にし、継承してくださる姿には、尊敬の念を覚えます。そんな廣畑さんの数々のお話をアーカイブ化できたことは、とても意味のあることだと思います。この全文インタビューや小冊子をたくさんの人に読んでいただき、震災の事実や、それを乗り越えた人々の芯の強さ、メッセージが伝えられたら嬉しいです。

共生システム理工学類 1年 八木田さくら

廣畑さん、本当にありがとうございました。